NEWS

講演会「三河地震から60年を迎えて」が開催される

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターと災害対策室は、１月13日(木)、大学院環境学研究科レクチャーホールにおいて、講演会「三河地震から60年を迎えて」を開催しました。

1944年12月７日、M7.9の東南海道地震が発生(三重・愛知・静岡、死者1,223名）した45日後の1945年１月13日早朝、三河地域をM6.8の「三河地震」が襲い、死者2,306名を出しました。現在は、体験者も高齢となり、被災を伝える機会も少なくなっています。こうした背景から、体験者とともに、三河地震を考え、東南海地震や内陸地震に備えるために、この講演会は企画されました。また、この講演会は、地震の研究と被災体験、その発掘保存運動を内容としていること及び大学で市民が講演する点で、珍しいものといえます。

数日前から新聞やテレビで報道され、問い合わせが多数寄せられたため、当日の朝、急遽、第２会場を隣接のロビーに設けましたが、200名の参加があり、会場は超満員となりました。参加者のほとんどは、高齢で、学童の時に被災された方も多く見受けられました。

講演会では、初めに、東京大学と気象庁の研究者による三河地震の地震活動に関する講演が行われ、三河地震は新潟県中越地震と同様に非常に余震活動が活発であったこと、２日前から前震が観測されていたことが報告されました。また、三河地震の発生があと半年遅ければ、戦争のために観測体制は完全に崩壊していたという指摘もありました。

続いて、災害対策室の２名の若手研究者、被災体験者の富田達躬さん（安城市)、被災体験を絵で伝えることに取り組んでいる画家の藤田哲也さんと阪野智啓さん(ともに愛知県立芸術大学)の対談が行われ、富田さんは70才を超えながらも当時の記憶を鮮明に述べ、また、２名の画家は被災を絵画に残す意気込みと苦労を語りました。

最後に、本学の研究者から、三河地震の断層運動について報告があり、講演会は盛況のうちに終了しました。

▲講演会の様子